

実践のまとめ（第9学年 英語科）

十日町市立松之山中学校 教諭 本多 貴紀

1 研究テーマ

主体的・対話的で深い学びの視点からみた教科書の有効利用

2 研究テーマについて

(1) テーマ設定の意図

新学習指導要領では「身につけた知識を、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能にまで高める」ことや「目的、場面、状況などに応じて、簡単な情報や考えを理解したり、伝え合ったりする」こと、「相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ことなどが述べられている。これらの趣旨を踏まえ、生徒に英語を用いた様々な場面や状況に触れさせたいと考えた。また、それらの場面や状況に応じて情報を理解したり、自分の考えを伝えたりすることができるようにさせたいとも考えた。

この達成に向けて、教科書を有効活用したいと考えた。教科書は学習指導要領の趣旨に沿って作られており、様々な場面や状況が設定されている。また、コミュニケーションを豊かにするための表現も豊富に用いられている。そのため、教科書の有効活用は新しい学習指導要領の学びを達成するための有効な手段の一つだと考え、本研究テーマを設定した。

(2) 研究テーマに迫るために

① 教科書本文の内容とゴールの活動との関連

授業の導入段階でゴールの活動で扱う発問を敢えて提示する。単元の最後に同じような質問を出題すること、その解決のために有効だと思われる表現を教科書から探し、記録する時間を毎時間設けることを事前に生徒に伝える。この時間を設定することで、教科書の表現を活用しながら課題解決できるのではないかと考える。

② グループ間での意見交流

グループでの意見交換をより効果的に行うために、「お出かけバス」と呼ばれる、協同学習の技法の1つとして紹介されている活動を行う。この活動はグループである程度意見がまとまった段階で、それをさらに高めたり練り上げたりするために、他のグループに出かけて情報収集をするスタイルの進め方（杉江, 2011）である。この活動を行うことで少人数でも効率的に意見交換ができるのではないかと考える。

(3) 研究テーマに関わる評価

以下の2つを比較し、評価につなげる。

- ① 導入時に書いた文章とゴールの活動で書いた文章の内容について比較する。
- ② ゴールの活動で書いた文章とそれまでの授業で記録した表現を比較する。

3 単元と指導計画

(1) 単元名

Unit 4 Be Prepared and Work Together (NEW HORIZON English Course 3 東京書籍)

(2) 単元（題材）の目標

防災・安全への関心を高め、地域の一員として防災に取り組む意識をもち、防災に関する自分の考えを英語で伝えることができる。

(3) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
間接疑問文と SVOO(what節)の文、現在分詞・過去分詞を用いた文の形・意味・用法を理解し、それをもとに、必要な情報を理解したり伝えたりすることができる。	地域の一員として防災に取り組む意識をもつために、外国人支援の取組について書かれた文の要点を捉えたり、書いたり話したりすることができる。	地域の一員として防災に取り組む意識をもつために、外国人支援の取組について書かれた文の要点を捉えたり、書いたり話したりしようとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画（全9時間、本時8／9時間）

次 (時数)	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法
1 (1)	・学習内容の確認 ・ターゲットとする発問への解答	◎今回のUnitのテーマについての映像を見よう。 ◎How can we help each other in a disaster?に関する自分の考えを書こう。	思・判・表 ターゲットとなる質問に答えている。 態 ターゲットとなる質問に答えようとしている。 【観察・ワークシート】
2・3 (2)	・教科書本文の確認 ・Key Sentencesの練習 ・前時に扱った質問の答えに使えるような表現を記録	◎本文の大まかな内容を確認しよう。 ◎Key Sentencesの練習をしよう。 ◎How can we help each other in a disaster?の答えに使えるような表現をメモしよう。	思・判・表 本文の大まかな内容を捉えている。 知・技 間接疑問文とSVOO(what節)の文を用いた文の形・意味・用法を理解している。 態 質問の解答に必要な表現をメモしようとしている。 【観察・ワークシート】
4 (2)	・教科書本文の確認 ・Key Sentencesの練習 ・質問の答えに使えるような表現を記録	◎本文の大まかな内容を確認しよう。 ◎Key Sentencesの練習をしよう。 ◎質問の答えに使えるような表現をメモしよう。	思・判・表 本文の大まかな内容を捉えている。 知・技 現在分詞を用いた文の形・意味・用法を理解している。 態 質問の解答に必要な表現をメモしようとしている。 【観察・ワークシート】

<p>5 (3) 本時 3 / 3</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教科書本文の確認 Key Sentences の練習 質問の答えに使えるような表現を記録 グループ間での意見交換 ターゲットとする質問に解答 	<ul style="list-style-type: none"> ◎本文の大まかな内容を確認しよう。 ◎質問の答えに使えるような表現をメモしよう。 ◎グループで意見交換をしよう。 ◎How can we help each other in a disaster?に対する自分の考えを書こう。 ◎書いた内容をA L Tに伝えて納得してもらおう。 	<p>思・判・表本文の大まかな内容を捉えている。 ターゲットとなる質問に答えている。</p> <p>知・技過去分詞を用いた文の形・意味・用法を理解している。</p> <p>態クラスメイトとの意見交換をとおして、質問の解答に必要な表現を獲得しようとしている。 ターゲットとなる質問に答えている。</p> <p>【観察・ワークシート】</p>
<p>6 (1)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 前時に答えた質問と似たような質問に解答 	<ul style="list-style-type: none"> ◎If we live together in a shelter after a disaster, how can we help each other?に対する自分の考えを書こう。 	<p>思・判・表ターゲットとなる質問に答えている。</p> <p>態ターゲットとなる質問に答えている。</p> <p>観察・ワークシート】</p>

4 単元と生徒

(1) 単元について

本単元は防災についての単元である。近年防災対策の三要素として「自助」「共助」「公助」の「三助」の考え方が取り上げられている。本単元の学習をとおして、防災に対する生徒の意識を高めさせたい。本単元では、災害時に外国人が直面した状況についても学習する。多様化する社会において、自分たちに何ができるのか考え、自分の言葉として英語で伝える良い機会にしたいと考える。

そこで本単元ではまとめの活動として、9月中旬にあった台風の影響でA L Tやその知人が苦勞した、という状況を設定し、教科書に用いられている”How can we help each other in a disaster?”という質問にA L Tが「確かにその考えなら安心できそうだ。」と納得させられるような自分なりの考えを書き、口頭で伝える活動を行う。以下のような手順を踏んで前述の活動に臨もうと考える。

- ① 単元の導入段階で同じ質問を生徒にし、自力で解答に挑戦させる。
- ② 毎時間の学習で①の質問に答えるために使えるような表現などを記録・蓄積させる。
- ③ ②で記録した表現をグループ間で交換、共有する。

これらの手順を踏むことで教科書の表現を有効に活用しながら、まとめの活動に使えるような表現を多く集めることができるのではないかと考える。

(2) 生徒の実態

英語を用いた他者とのコミュニケーションを好み、授業にも前向きに取り組む。また、グループでの学習活動も滞りなく行うことができる。反面、個々の生徒の定着度には差があ

る。GIGAスクール構想の一環で生徒一人一人にタブレット端末が配付された。タブレット端末を用いることで、分からない単語や文の意味、自分が言いたいと思っているが言えない単語や表現などをすぐに調べることができるようになった。そのため、英語を苦手とする生徒も自力で問題や学習課題に取り組みやすくなった。反面、タブレット端末を用いて調べればすぐに分かってしまうため、自分で思考したりグループで話し合ったりせずに問題を解決できてしまう。そのため、自分で思考する時間やグループで話し合う活動の在り方について、今まで以上に工夫して授業を進めていく必要がある。

5 本時の展開（令和4年10月19日実施）

(1) ねらい

- ・ 災害に対して自分たちに何ができるか説明する文章を書くために必要な表現を、話し合いをとおして獲得することができる。
- ・ 災害に対して自分たちに何ができるか説明する文章を書くことができる。
- ・ 災害に対して自分たちに何ができるか説明する文章を書くために必要な表現を、話し合いをとおして獲得したり、その表現をもとに文章を書こうとしたりしている。

(2) 展開の構想

本時はまとめの活動の事前準備として、自分がこれまで記録してきた表現を意見交換し合う。意見交換をするメリットとしては以下のようなことが考えられる。

- ① 自分が記録してきた表現とは違う表現をクラスメイトから得ることができる。
- ② 自分と同じ考えをもつ生徒がいることで、自分の意見に自信をもつことができるようになる。

これらの活動をとおして、教科書の表現を有効活用しながら、生徒が自分の意見を伝えることができるようにしたいと考える。

(3) 展開

時間 (分)	学習活動	教師の働き掛け 予想される生徒の反応	□評価 ○支援 ◇留意点
7	○あいさつ ○前時までの確認	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今までに学習した内容を確認確認する。 ・ 本時までに記録してきた主発問の解答に役立ちそうな表現を確認する。 	
23	○意見交流	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分が記録してきた表現をグループ内で共有する。 ・ グループで共有した内容について、お出かけバズを用いて学級全体で共有する。 	思・判・表 態 主発問の解答に必要な表現を話し合いをとおして獲得することができる。 ◇意見交流で出された内容はホワイトボードを用いて可視化する。

10	○主発問 ○Writing活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ How can we help each other in a disaster? ・ 質問に対して自分の意見を書く。 	思・判・表 態 質問に関する答えを書くことができる。 ◇Writing活動の際は、一人で文章を書くこと、話合いで出された表現は参考として使っても良いことを伝える。
5	○自己評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 振り返り ・ まとめ 	

6 実践を振り返って

(1) 授業の実際

授業では生徒同士の意見交換が活発に行われた。授業当日に至るまでに3回同じような質問に解答する機会を設定した。特に英語を苦手とする生徒で、それまでは教科書の表現を使って文章を書こうとする様子が見られるものの自力で英文を書くことが困難だった生徒も、クラスメイトとの意見交換を通して、質問に対する自分の答えを一通り書くことができていた。また、英語を得意とする生徒は教科書の表現を参考にしながら”I’m going to talk about~.”のような導入に用いる表現や first や second といったディスコースマーカ―などを用いて、順序立てて自分の考えを英語で書くことができていた。

課題は授業で用いたワークシートの使い方について十分に共通理解を図ることができず、自分の考えを書く箇所にクラスメイトからの意見を書いたり教科書の有益な表現を書いたりする生徒がいたことである。また、お出かけバズは本来は聞き手が他のグループに行き、意見を尋ねてくる活動だが、ただの話し合いになってしまった。活動の段取りをしっかりと確認・イメージさせる手立てが不十分だったと考えられる。

本時の指導後に書かれた英文をクラス全体で共有し、同じようなテーマでALTとのSpeaking活動を行った。

(2) 研究テーマに関わって

① 導入で書いた文章とゴールの活動で書いた文章の内容について

単元の導入で書いた文章では、water や food といったそれまで学習した表現から災害時に使いそうな表現や直前の単元で学習した stay (at) home や evacuate と行った表現を用いて文章を書こうとしている生徒が多かった。書いた文章は動詞だけで書いてあるような文章が多く、文章として書かれていないものも多く見られた。また、解答欄が空欄の生徒や”No idea.”と解答する生徒も見受けられた。しかし、最終的には個人差があるものの、最初の解答から明らかにアウトプットされている語や文の量が増えた。内容に着目すると、emergency kit や prepare, information, local shelter, evacuation map といった、本単元で学習した表現を用いて解答している様子が見られた。

② 活動で書いた文とそれまでの授業で記録してきた表現の比較

前述の通り、グループでの話し合いをとおしてターゲットとなる質問に対しての解答の記述量が大きく増えていた。意見交流を行うまでの生徒の記述を見ると大きく分けて以下

の2つの傾向が見られた。

ア 教科書の表現を用いながら、徐々に質問に対する記述量が増えた生徒

イ 教科書の表現を用いて答えようとしているものの、記述量そのものに大きな変化が見られなかった生徒

英語を比較的得意とする生徒に A の傾向が、苦手とする生徒に B の傾向が主に見られた。今回は授業公開の際の話し合いの影響に焦点を当てるため、それまであえてペアやグループで意見を共有する機会を設定しなかった。しかし、前述の傾向から教科書の内容を確認し、メモするだけでは特に英語を苦手とする生徒が教科書の表現を活用できるようになっていなかったということが推察される。

(3) 成果と今後の課題

今回の実践をとおして、教科書の表現を継続的に記録し、意見を共有することで、生徒のアウトプット量を増やすことができた。また、生徒たちは教科書の表現と自分の身近な語句とを結びつけながら自分の意見を書くことができた。今後の課題として以下の3点が挙げられる。

① 意見共有、中間指導のタイミング

前述のとおり、今回は話し合いの必要性および必然性を高めるために意図的に意見交換する回数を少なくした。結果、話し合いをしたことによって生徒の記述量が大幅に増加した。しかし、英語を苦手とする生徒は教科書の表現を用いようとはしているものの、文章での記述に至っていない。学習した内容を習得することができるように、意見共有や中間指導のタイミングを考える必要があると強く感じた。

② 目的・場面・状況の設定

本実践の協議会において目的・場面・状況の設定と評価項目が必ずしも合致しているとは言えないという意見が出された。生徒にどのような力を身に付けさせたいかや教師が設定した目的・場面・状況で生徒のどのような力を見取ることができるのかを指導者側がしっかりとイメージし、目的・場面・状況の設定および改善を継続的に行う必要がある。

③ ゴールイメージの明確化

今回の実践で継続的に生徒が解答してきた”How can we help each other in a disaster?”という質問について、自分自身が改めて実際に考えを書くと、確かに教科書の表現を使って意見を書くことはできるが、それと同時にディスコースマーカーや話し始めの表現など、様々な情報が必要となり、教科書の表現を有効に活用するためにはリテリングやリプロダクションのような活動でも良かったのではないかと感じた。ゴールの活動を設定し、そこでどのような表現が表出されると考えられるか、そのためにはどのような指導が有効かといったゴールイメージを教師がはっきりともつことが大切だと感じた。

<参考・引用文献>

杉江修治.『協同学習入門 ○基本の理解と 51 の工夫』.ナカニシヤ出版.2011